

第57回 日本泳法研究会

三重県鈴鹿で開催

日本泳法委員長 八木沼正彦

3月22・23日の両日、三重県津市の無形文化財に指定されている「観海流」を課題にして第57回日本泳法研究会が鈴鹿サーキット「フラワーガーデンホテル」と三重県営鈴鹿スポーツガーデン水泳場において開催された。観海流を研究するのは4回目であるが、三重県で開催されるのは初めてである。

今回は日水連から林利博会長、山本浩常務理事をはじめ三重県水泳連盟の山本千秋会長、澤村常彦副会長、山本正義副会長、島正明理事長などが勢揃いし、400名を超える参加者と共に盛大に開かれた。

津市からは市長に名代として黒岩英二教育次長が参加され、津市として観海流の歴史的な存在意義について祝辞を頂戴した。

昨今の研究会は当該流派の発祥した場所、地域に出向くことによって流派の発生した環境、泳ぎ方の必然性などを感じてもらえるように企画しているが、現在の津市阿漕が浦海岸にはヨットハーバーや岸壁が設置され、大変厳しい状況に追い込まれていることは事実だ。また、津市において大人数のコンベンションの会場とボールの確保が難しいため残念ながら、同じ三重県ながら鈴鹿においての開催となった。

約12年に1回順番が回ってくる研究会であるが、当該流派は発表のための準備で新しい文献の発見や泳ぎ合わせによる流派内の結束を強めることも目的に入っている。今回の収穫は津から分派しこれまで交流の少なかった熱田水泳協会、四日市婦人水泳クラブが大同団結し、発表に臨んだことである。

特に熱田水泳協会は明治40年愛知県逢うガ鳥水泳協会創設から始まる歴史を持ち、伊勢湾の環境変化による水泳場の確保からあちこちと水泳場を探し求め、ご苦労した歴史を紹介され、新たな熱田水泳協会の存続についても模索している。

観海流の本来の泳ぎは疲れず長距離を泳ぎ渡ることを目的としており、遠泳する中で距離による沖渡試験があり、信号になっている独特な陣太鼓の音の元に伊勢湾横断を行った経緯をもつ流派である。

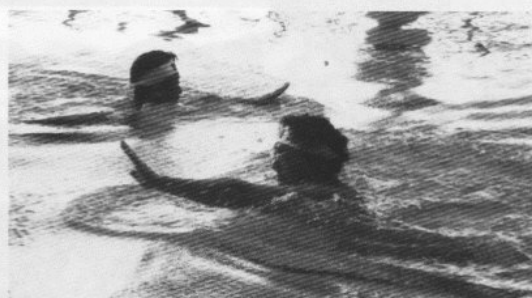
現在、観海流は津における無形文化財としての認知度が減っており、会員数の確保が大変になっている。そして現在の泳ぎ手が五十代以上が多く、行政の協力も求め流派存続のために日本泳法委員会としても普及と保存を助けたいと考えている。



再建された観海流流祖「宮発太郎」像



開会式で挨拶する林利博会長



3一つ拍子抜手熱田型



4三つ拍子抜手